関西自然保護機構会報（16）51－52，1988

大台ケ原森林の鹿に逢って思う

福　渡　七　郎
（ウハラ生物科学研究所）

ＫＯＮＣから来る見学会の案内は，私が一ばん楽しみにしていることの一つであるので，許される限り参加するよう心掛けている。特に今回の大台ケ原見学会の仲間に，小学生の参加をゆるしていただいたことは“何よりもありがとう”と思いました。小学生たちは動くものを見付ける特技を持っていて，今回も最後の夕食の時，裏の森からレストランの窓に姿を見せた鹿を見付けたのも小学５年生でした。林縁の鹿が野生のままの姿で現れたので，私たちの驚きと感激はとても言表わすこともできません。鹿は我々人間をみつけ，ゆっくりＵターンして森の中に消えた。

すべての生物に生存権はあるのか

近ごろ，人権問題がやかましいが，実際，人権はあるのか，ないのか，それさえ，疑われる世の中である。しかし，大台ケ原の森林を訪ねて，目のあたり鹿の食害を見た人は思わず樹木の痛々しい姿に同情してしまう。しかし，もし鹿の食糧を奪う天敵の生物が居たとすれば，どうだろうか。ともあれ，我々は鹿の生存も守りたい。皮を剥ぎとられ，枯れていく樹木の生存も守りたい。

1983年の夏，ニュージーランドの南アルプスを訪ねたとき，ポドカルパス（*podocarpus*）の生い茂る天然林の樹海に，移入された鹿が増え，その害が云々され，ハンターの活躍が報じられた。そののち，私たちはカンタベリー平原の大牧場を訪ねた。ここの主人は羊のほかに鹿を飼い始めた。1970年ごろ，政府は鹿の増殖力を見て，これを事業化する立法を成立させたからである。今では，彼は鹿の大牧場の経営に成功した。使用しているのは，若いコリー犬だけである。彼が命令を下すと，コリーは一目散に走り牧場から森林に消えた。やがて林縁から牧場へ数十頭の赤鹿が編隊をつくり走って来た。みどりの草原の中を右へ左へと走る赤鹿の編隊の美しさは，なんとも言えない，あでやかなショウであった。

彼はこの養鹿事業がいかに有利であるか，またこの鹿は日本やマンシュウの鹿と同じ種類であることを説明した。ニホンジカ生存の一つのモデルを意外な所で見る思いをした次第である。

貴重な大台ケ原の森林

大台ケ原の森林はいわゆる吉野の森林に続いている。古代の吉野の森林はどんな姿であったであろうか。吉野は400年にわたる造林の歴史を持ち，その間に姿を変えて行った。そしてスギ，ヒノキを主体とする一大造林地となり，次第にモノカルチャー化し，最近では一部の人々によって憂慮される程に変わってしまった。しかし現在も，トガサワラ（*Pseudotsuga japonica*）の天然林も僅かながら残っており，ナギやイヌマキなどポドカルパス属の樹林も，この地域に残存し，古代の森林をしのばせている。

大台ケ原は1,500ｍを越える高原であるため，大阪から程近いに拘らず，遠く北海道，カラフ

ト，マンシュウ，シベリヤと同じ植生であるトウヒ，モミ属林が見られることは本当に幸せと言わざるをえない。美しい下生のミヤコザサも韓国北部のソーラク山，1,708ｍの麓で同じように見ることが出来る。丁度，大台ケ原シオカラ谷の森の山道に近くツツジやシャクナゲが咲乱れていた。その美しさもさることながら，高原の春景色の中に，枝を差しちがえたトウヒ，モミの樹形の素晴らしさに，ひとしお感激された方々も少なくなかったので，なかろうか。

吉野と大台ケ原の森と植物は，古代から人間と深い交わりを持ち続けた。同時にそこに住む鹿や動物たちも，人間の文化と深い係わりあいを持って来た。両者の間には生存の原理に従って色々と助合いも，争いも絶えなかったと思う。いま起こっている問題も，その一駒である。一日も早い解決を望んでおり，またその実現を信じているものである。

大台ケ原の山々に日も落ちた８時すぎ，予期しなかった野生鹿の訪問をうけた感激を噛みしめながら，山を下りた。

1988. 7. 7. 記す。

付記：見学会は1988年の春，５月28，29日の両日に行われた。

だに実現されていないし、関係当局で実現する努力がされているとも聞いていない。質の高い指導者がいることで、どれだけ子供たちの知性と感性が刺激されることか。それは頭の固くなった私たち大人にとって更に言えることかもしれない。

今後、大台ケ原の管理が議論されてゆく時に、自然とそれを利用する人と施設、という三つの管理対象が区分されるわけだが、それらを結びつける解説員・指導者（リーダー）の養成こそがこの貴重なモデル地域を生かすポイントであり、現在の（最大の）ネックである。そう再確認してバスに乗り、人であふれる駐車場を後にした。

おわりに、大台ケ原について考える機会を与えてくださったKONC事務局と参加者の皆様、特に子供さん方に感謝いたします。